

スポーツ系大学生における脳震盪についての研究

近藤 由依 (競技スポーツ学科 トレーニング・健康コース)
指導教員 佃 文子

キーワード：脳震盪，SCAT2

1. 緒言

脳震盪を起こしたスポーツ選手の管理および現場への復帰は重要な課題とされており，「SCAT2」の開発により，ラグビーや柔道で共通した同じフォームを用いて，脳震盪を起こしたスポーツ選手の対応と管理が一貫して行われるようになってきた。

「SCAT2」は，脳震盪を疑うべきである症状，また，身体的兆候（不安定感など）脳機能の障害，あるいは異常行動を把握できるものであり，さらに脳震盪の症状の程度を評価するデータとしてみるができる。受傷前に評価することで脳震盪を引き起こした場合の基準データとみなすことが出来るため，スポーツ現場での応用が期待できる。

そこで，体育・スポーツ大学の学生の脳震盪の受傷状況を把握し，今後の大学内において安全なスポーツ環境整備を目的として，基礎的資料を作成することにした。

2. 方法

対象者はB大学の学生，1年生（男子223名，女子91名，計314名），競技特性としてコンタクトを有する体育会運動部に所属する2～4年生（男子150名，女子31名，計181名），全体の合計は，男子373名，女子122名（計495名）であった。尚，本研究では，サッカー，バスケットボール，ラグビー，柔道の男女をコンタクトスポーツ種目とした。測定項目は，「SCAT2」に準じ，自覚症状・既往歴の調査・認知評価（SAC）・平衡機能評を用いた。

3. 結果と考察

体育・スポーツ大学の1年生全体の結果から，約6.5%に脳震盪の受傷歴があった。

運動部に所属している2～4年生では，学年を積み重ねるごとに既往歴が増す傾向があった。

女性の既往歴あり群は男性の既往歴有群及び無群に比べ，自覚症状を訴えている人が多く，女性は，男性より症状に敏感なことが考えられた。

体育会運動部のラグビー，柔道部に脳震盪の

既往歴が圧倒的に多く，頭部打ち付けや強いコンタクトが多い競技で，脳震盪が多く発生していた。これらの結果より，どのような競技レベルでも，ラグビーや柔道部には脳震盪の安全対策が重要だという事が考えられる。脳震盪を完全に防止することは不可能だが，万一の脳震盪時による頭部回転加速力が加わる事を少しでも和らげるために，頸部の固定筋力などを積極的に高めておくべきだと考えられた。また，このような脳震盪が多数発生するクラブでは，継続的な評価を行い，重大事故発生時の対応策や手順を十分訓練しておくことが大切だと考えられた。

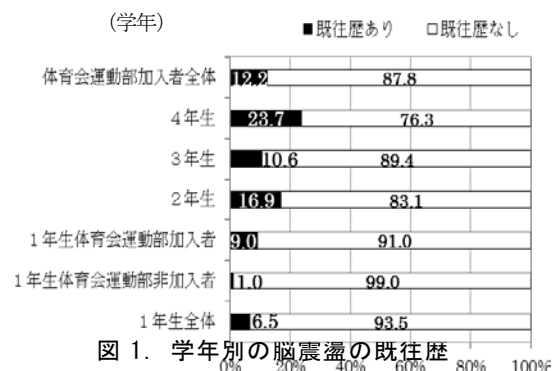


図1. 学年別の脳震盪の既往歴

海外で報告された脳震盪評価の基準と比較すると，年齢や運動経験の差により，B大学の認知評価，平行機能評価の結果が異なっていた。

4. 結論

脳震盪の既往歴は，一般学生に比べて運動部所属者に多く，さらにコンタクトスポーツの実施者に多かった。SCAT2で用いられる指標は年齢や運動経験により異なることが明らかとなった。

参考文献

- 1) Jinguji ほか：Sport Concussion Assessment Tool-2：Baseline Values for High School Athletes 2012. 5
- 2) 日本ラグビーフットボール協会：脳震盪ガイドライン等について 2011. 9
<http://www.rugby-japan.jp/about/committee/safe/concussion2012/guideline.html>

